

---

# 君のために俺が居る

おおやん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君のために俺が居る

### 【著者名】

おおやん

Z5584E

### 【あらすじ】

片思いの友達に、好きな子が居るんだと相談され、戸惑う。好きだけど伝えられずに苦悩する、と言うお話です。（BL小説です）

「ちょっと、相談したい事があるんだ。いいかな？」  
ある晴れた日曜日。俺は突然、同じ卓球部の結城俊に呼び出された。  
特に断る理由もなく、切羽詰つた様子の結城に、よほど重大な悩み  
があるのだろうと思いつくの喫茶店に入った。

結城が他の誰でももなく、俺を選んでくれた事が単純に嬉しかつ  
た。

中に入るとクーラーが効いていて汗ばんだ肌に心地いい。

テーブルに着いて、適当に飲み物を注文する。

俯いている結城に視線を移すと今にも泣きそうな顔をしている。  
「何かあつたのか？」

そう尋ねると、バッと顔を上げて堰を切つたように話し始めた。

「実は……僕、杉浦君のこと好きになっちゃったみたいで。……前  
から気になってたんだけど」

注文したオレンジジュースに口をつけながら切々と杉浦に対する思  
いを語つてゆく。

「やつぱり、男同士だし……こんな気持ち迷惑だよね……」

結城がはあ……つと、ため息を吐くたびに、俺の胸は締め付けられ  
たように苦しくなる。

俺の気持ちには全く気がついていないんだろうな。

まあ、薄々判つてはいたことなんだ。

結城のアイツに向けられる視線は特別だから。

切なさを誤魔化すようにアイスティをかき回す。

カラソと涼しげな音を響かせて溶けてゆく氷と一緒にこの思いも  
溶けてしまえば良いのに。

結城を元気付ける言葉を探しながら、そんな事を考えていた。

結城を困らせたくない。

だから俺は、自分の思いをひた隠しにして、友達でいる事を選んだ。結城は優しいから、知つてしまえば、きっと俺の気持ちに応えようとするはず。

あいつの悩む顔だけは、見たくない。

それはわかってる。

わかってるのに、一人でいると胸の奥に隠した想いが溢れ出してきそうで、平常心を装うので精一杯だった。

口では、

「頑張れよ」

とか言つてるが、心のどこかでは杉浦にふられて俺に泣きついてくる事を望んでる。

そんなある日の事、俺たちは偶然街で、杉浦とその幼馴染だと男が一緒に居る場面に遭遇してしまった。

ただの幼馴染だからというには違和感を感じてしまうほどに、一人の仲のよさを見せ付けられて、それ以来結城はすっかり塞ぎこんでしまった。

「結城……。最近元気ないけど、なんかあつた?」

「ううん。……なんでもないよ、気にしないで」

仲のよい友達の声掛けにも、抑揚の無い返事が返つてくる。

「おい、結城。話がある」

そんなアイツの姿を俺はこれ以上見ていることが出来なくて、人気のない屋上に呼び出した。

「な、なに? 藤川君」

「いつまでもウジウジ悩んでるなよ

「え?」

俺の言葉に、結城は驚いて顔を上げた。

「お前も男だつたら、はつきり告つたらどうなんだ?」

「で、でも……杉浦君には……」

「だったらどうなんだ? それ、本人の口から聞いたのか?」

俺の問いかに、結城は静かに首を振る。

「もしかしたら、違うかもしれないだろ？ 男ならいつまでも悩んでないで、想いを伝えて来いよ」

「ただけど、僕……怖い。杉浦君にこんな感情持つてるって知られて嫌われるのが……」

眉根を寄せて、悲しそうな顔をする。

そんな顔は見たくなくて、俺は堪らずその小さな身体を抱きしめた。「ふ、藤川君！？」

俺の行動がよほど予想外だったのか、結城はしばらく固まって動けずに、小さな瞳を見開いて何が起こったのか理解しようとしているみたいだった。

「怖いんなら……あいつへの想いなんか捨てちまえ」

「……え！？」

「どっちかしかないだろ？ 告る勇気も無いのに想つても仕方がないだろ？ 男なら、ぶつかって行けよ！」

そう結城に言いながら、自分自身にも言い聞かせる。

そうだ……告る勇気も無いのに、想つてるなんてばかげてる。

そう簡単に想いを忘れる事が出来ない事も、告るのに物凄い勇気がいる事も俺は知ってる。

知つて……自分が出来ない事を結城にさせようとしてる。

俺は、最低な人間だ。

自分には勇気が無いくせに、それを結城に求めてる。  
しばしの沈黙。

俺にはとてつもなく長い時間に感じられた。

「……ありがとう。藤川君。僕、頑張つて杉浦君に言つてみるよ」

「そ、そうか……」

パツと顔を上げた結城には久しぶりに見るやつぱりとした笑顔。

その笑顔に俺は不覚にもドキッとしてしまつ。

「じゃ、僕……もう行くから……相談に乗つてくれてありがとう」

そう言って屋上の扉を開けようとする。

「あ、結城！」

「……なに？」

俺の手の届かないところへ行ってしまいそうな気がして、俺は思わず呼び止めた。

きょとんとした顔で振り向いた結城。

「……頑張れよ。俺は、いつでもお前の味方だから」

「うん！」

はにかんだ笑顔を見せながら、結城は階段を軽快な足取りで下りてゆく。

これで……いいんだ。

アイツのために俺はいる。

友達でも構わない。

傷ついた時に支えになれるよ」と、いつでもここにいるから。

初夏の風を感じながら、俺はいつまでも結城の後姿を見送った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5584e/>

---

君のために俺が居る

2010年10月11日01時41分発行